

5 行列式

この章では、 n 行列 A に対して行列式 $\det(A)$ と呼ばれるスカラーを定義し、その性質について調べる。最初に 2 次、および 3 次行列に対し考え、次に一般の n 次行列に対しても定義しその性質を調べる。

5.1 2 次, 3 次行列の行列式

2 次の場合も 3 次の場合も行列式は「幾何的」側面と「代数的」側面を持つ。最初に 2 次行列の行列式の代数側面を見ておこう。

定義 5.1 行列 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ に対し $ad - bc$ を A の行列式 (determinant) といい $\det(A)$ と書く。

$$\det(A) = \begin{vmatrix} a & b \\ c & d \end{vmatrix}$$

と書くこともある。

これは天下りの定義なので、意味は定義から直接はよく分からない。そこで行列式のもつ代数的性質を見よう。 $a = \begin{pmatrix} a \\ c \end{pmatrix}$, $b = \begin{pmatrix} b \\ d \end{pmatrix}$ とおく。2 次行列に対しその行列式を $\det(a, b)$ とも書く。すなわちベクトル 2 個の組から実数への写像と考える。

命題 5.2 2 次行列の行列式は次の性質を持つ。

(1) [多重線型性] $\det(a, b)$ は各成分に関して線型である。ここで a, a', b, b' は任意に与えられたベクトル, α は任意に与えられた実数とする；

$$1) \det(a + a', b) = \det(a, b) + \det(a', b)$$

$$2) \det(\alpha a, b) = \alpha \det(a, b)$$

$$1') \det(a, b + b') = \det(a, b) + \det(a, b')$$

$$2') \det(a, \alpha b) = \alpha \det(a, b)$$

(2) [交代性] $\det(b, a) = -\det(a, b)$

(3) [基本ベクトルに対する値] $e_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$, $e_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ とすると $\det(e_1, e_2) = 1$

演習問題 5.1 命題 5.2 を証明せよ。

逆にこの 3 つの性質は行列式を特徴づける。すなわち次が成立する。

このプリントも含め講義関連のプリントは <http://math.cs.kitami-it.ac.jp/~kouno/kougi.html> においてある。

命題 5.3 2 項数ベクトル 2 個の組に対し実数を対応させる写像 $D(a, b)$ が (1), (2), (3) の性質を持てば $D(a, b) = \det(a, b)$ である。

演習問題 5.2 $D(a, b)$ が (1), (2) の性質を持てば $D(a, b) = D(e_1, e_2) \det(a, b)$ である事を示せ。この事から (1), (2), (3) を満たせば, $D(a, b) = \det(a, b)$ が分かる。ヒント: $a = ae_1 + ce_2$ のとき, $D(a, b) = aD(e_1, b) + cD(e_2, b)$ を示す。同様に b も $b = be_1 + de_2$ として $D(e_1, b)$ および $D(e_2, b)$ を計算していく。

行列式については次が成立する。

定理 5.4 $\det(AB) = \det(A) \det(B)$

証明 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}, B = \begin{pmatrix} p & q \\ r & s \end{pmatrix}$ とおくと, $\det(A) = ad - bc, \det(B) = ps - qr$ である。 $AB = \begin{pmatrix} ap + br & aq + bs \\ cp + dr & cq + ds \end{pmatrix}$ なので, $\det(AB) = (ap + br)(cq + ds) - (aq + bs)(cp + dr) = apcq + apds + brcq + brds - (aqcp + aqdr + bscp + bsd r) = adps + bcrq - adqr - bcps = ad(ps - qr) - bc(ps - qr) = (ad - bc)(ps - qr) = \det(A) \det(B)$ となる。 ■

この定理より次の逆行列の存在に関する定理が得られる (高校で扱っているかもしれない)。

定理 5.5 2 次行列 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ が逆行列を持つ必要十分条件は $\det(A) \neq 0$ である。このとき A の逆行列 A^{-1} は

$$A^{-1} = \frac{1}{\det(A)} \begin{pmatrix} d & -b \\ -c & a \end{pmatrix}$$

となる。

証明 $\tilde{A} = \begin{pmatrix} d & -b \\ -c & a \end{pmatrix}$ とおくと, $A\tilde{A} = \tilde{A}A = \det(A)E$ である。 $\det(A) \neq 0$ のとき $B = \frac{1}{\det(A)}\tilde{A}$ とおくと, $AB = BA = E$ となり, B が A の逆行列であることが分かる。

A の逆行列 A^{-1} が存在するとき $AA^{-1} = E$ なので $\det(A) \det(A^{-1}) = \det(AA^{-1}) = \det(E) = 1$ となり, $\det(A) \neq 0$ が分かる。 ■

次に 2 次行列の行列式の幾何的側面について考えよう。行列式 $\det(a, b)$ の絶対値は a と b が張る平行 4 辺形の面積になっている。更にベクトル a から見て b が左にあるとき (ベクトル a, b は右手系をなしている, という) 正, 右にあるとき (ベクトル a, b は左手系をなしている, という) 負になっていることが分かる。そこで正負もこめたこの値を a と b が張る平行 4 辺形の「有向面積」と考えることとする。即ち絶対値は a と b が張る平行四辺形の面積を表し, a, b が右手系をなしているとき正, 左手系をなしているとき負の値をとる。行列式はそのようなものと考えることができる。

3 次の行列に対し行列式を「代数的」に定義するのは後回しにして、「幾何的」に定義する。そのために 3 項ベクトルに対し外積を定義する。

定義 5.6 $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix}, \mathbf{y} = \begin{pmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{pmatrix}$ に対し $\mathbf{x} \times \mathbf{y} = \begin{pmatrix} \begin{vmatrix} x_2 & y_2 \\ x_3 & y_3 \end{vmatrix} \\ \begin{vmatrix} x_3 & y_3 \\ x_1 & y_1 \end{vmatrix} \\ \begin{vmatrix} x_1 & y_1 \\ x_2 & y_2 \end{vmatrix} \end{pmatrix}$ を \mathbf{x} と \mathbf{y} の外積 (outer

product) またはベクトル積 (vector product) という。

命題 5.7 \mathbf{x} と \mathbf{y} に対し $\mathbf{x} \times \mathbf{y}$ は \mathbf{x}, \mathbf{y} と直交する。 $\mathbf{x} \times \mathbf{y}$ の絶対値は \mathbf{x} と \mathbf{y} の張る平行 4 辺形の面積である。また $\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2, \mathbf{e}_1 \times \mathbf{e}_2$ が右手系をなす。

略証 内積 $(\mathbf{x} \times \mathbf{y}, \mathbf{x}), (\mathbf{x} \times \mathbf{y}, \mathbf{y})$ はそれぞれ 0 になるので $\mathbf{x} \times \mathbf{y} \perp \mathbf{x}, \mathbf{x} \times \mathbf{y} \perp \mathbf{y}$ が分かる。

\mathbf{x} と \mathbf{y} のなす角を θ とすると, $(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = |\mathbf{x}||\mathbf{y}|\cos\theta$ である。 \mathbf{x} と \mathbf{y} の張る平行 4 辺形の面積を S とすると, $S^2 = (|\mathbf{x}||\mathbf{y}|\sin\theta)^2$ より, $S^2 = |\mathbf{x}|^2|\mathbf{y}|^2 - (\mathbf{x}, \mathbf{y})^2$ を得る。これを計算すると,

$$S^2 = \begin{vmatrix} x_2 & y_2 \\ x_3 & y_3 \end{vmatrix}^2 + \begin{vmatrix} x_3 & y_3 \\ x_1 & y_1 \end{vmatrix}^2 + \begin{vmatrix} x_1 & y_1 \\ x_2 & y_2 \end{vmatrix}^2 \quad \text{で } |\mathbf{x} \times \mathbf{y}| \text{ は平行 4 辺形の面積になる。}$$

また $\mathbf{e}_1 \times \mathbf{e}_2 = \mathbf{e}_3$ より $\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2, \mathbf{e}_1 \times \mathbf{e}_2$ が右手系をなす事が分かる。 ■

命題 5.7 は外積の幾何的定義ともいえる。2 つのベクトル \mathbf{a}, \mathbf{b} に共に直交し, \mathbf{a}, \mathbf{b} の張る平行 4 辺形の面積と同じ長さを持つものが \mathbf{a} と \mathbf{b} の外積になる。

命題 5.8 外積は次の性質を持つ。

(1) [多重線型性] $\mathbf{x} \times \mathbf{y}$ は各成分に関して線型である。ここで $\mathbf{x}, \mathbf{x}', \mathbf{y}, \mathbf{y}'$ は任意に与えられたベクトル, α は任意に与えられた実数とする;

$$1) (\mathbf{x} + \mathbf{x}') \times \mathbf{y} = \mathbf{x} \times \mathbf{y} + \mathbf{x}' \times \mathbf{y}$$

$$2) (\alpha\mathbf{x}) \times \mathbf{y} = \alpha(\mathbf{x} \times \mathbf{y})$$

$$1') \mathbf{x} \times (\mathbf{y} + \mathbf{y}') = \mathbf{x} \times \mathbf{y} + \mathbf{x} \times \mathbf{y}'$$

$$2') \mathbf{x} \times (\alpha\mathbf{y}) = \alpha(\mathbf{x} \times \mathbf{y})$$

(2) [交代性] $\mathbf{y} \times \mathbf{x} = -\mathbf{x} \times \mathbf{y}$

(3) [基本ベクトルに対する値] $\mathbf{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{e}_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ とすると

$$\mathbf{e}_1 \times \mathbf{e}_2 = \mathbf{e}_3, \mathbf{e}_2 \times \mathbf{e}_3 = \mathbf{e}_1, \mathbf{e}_3 \times \mathbf{e}_1 = \mathbf{e}_2$$

逆にこの 3 つの性質で外積は特徴付けられる。即ち 3 項数ベクトルの 2 個の組に対し, 実数を対応させる写像が上の (1) 多重線型性, (2) 交代性, (3) 基本ベクトルに対する値, の 3 つの性質を持つとき, それは外積と一致する。

命題 5.9 $(\mathbf{x} \times \mathbf{y}, \mathbf{z})$ は $\mathbf{x}, \mathbf{y}, \mathbf{z}$ が右手系のときは $\mathbf{x}, \mathbf{y}, \mathbf{z}$ が張る平行 6 面体の体積になる。 $\mathbf{x}, \mathbf{y}, \mathbf{z}$ が左手系のときは, 体積にマイナスをつけたものになる。

演習問題 *5.3 命題 5.8, 5.9 及びを証明せよ。

定義 5.10 行列 $A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{pmatrix}$ に対し $\mathbf{a}_1 = \begin{pmatrix} a_{11} \\ a_{21} \\ a_{31} \end{pmatrix}$, $\mathbf{a}_2 = \begin{pmatrix} a_{12} \\ a_{22} \\ a_{32} \end{pmatrix}$, $\mathbf{a}_3 = \begin{pmatrix} a_{13} \\ a_{23} \\ a_{33} \end{pmatrix}$

とおくとき, A をベクトルを 3 つ並べたものと見て $A = (\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2 \ \mathbf{a}_3)$ と書く。このとき

$$\det(A) = (\mathbf{x} \times \mathbf{y}, \mathbf{z})$$

を A の行列式 (*determinant*) と呼ぶ。

$\det(A)$ は 3 つのベクトル $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ が張る平行 6 面体の「有向体積」と考えることができる。即ち命題 5.9 から $\det(A)$ の絶対値は 3 つのベクトル $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ が張る平行 6 面体の体積であり, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ が右手系をなしているとき正, 左手系をなしているとき負の値をとる。

命題 5.11 $A = (\mathbf{x} \ \mathbf{y} \ \mathbf{z})$ に対し

$$\tilde{A} = \begin{pmatrix} (\mathbf{e}_1 \times \mathbf{y}, \mathbf{z}) & (\mathbf{e}_2 \times \mathbf{y}, \mathbf{z}) & (\mathbf{e}_3 \times \mathbf{y}, \mathbf{z}) \\ (\mathbf{x} \times \mathbf{e}_1, \mathbf{z}) & (\mathbf{x} \times \mathbf{e}_2, \mathbf{z}) & (\mathbf{x} \times \mathbf{e}_3, \mathbf{z}) \\ (\mathbf{x} \times \mathbf{y}, \mathbf{e}_1) & (\mathbf{x} \times \mathbf{y}, \mathbf{e}_2) & (\mathbf{x} \times \mathbf{y}, \mathbf{e}_3) \end{pmatrix}$$

とおくと $\tilde{A}A = \det(A) \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$ が成立する。

この命題は計算により出てくる。これを用いると次が得られる。

演習問題 5.4 命題 5.11 を証明せよ。

定理 5.12 行列 A に対し命題 5.11 で定義された \tilde{A} を考える。このとき $A\tilde{A} = \tilde{A}A = \det(A) \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$

である。特に $\det(A) \neq 0$ のとき逆行列が存在して $A^{-1} = \frac{1}{\det(A)} \tilde{A}$ となる。

次に 3 次行列に対する行列式の代数的性質を考えよう。3 次行列 $A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{pmatrix}$ に対し, $\det(A) = (\mathbf{a}_1 \times \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3)$ と定義したが, これを 3 個のベクトルの組 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ に対し実数を対応させる写像と見て $\det(A) = \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3)$ と書くと次の性質を持つ事が分かる。

命題 5.13

(1) [多重線型性] $\det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3)$ は各成分に関して線型であるここで $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}'_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}'_2, \mathbf{a}_3, \mathbf{a}'_3$ は任意に与えられたベクトル, α は任意に与えられた実数とする;

1) $\det(\mathbf{a}_1 + \mathbf{a}'_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) = \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) + \det(\mathbf{a}'_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3)$

2) $\det(\alpha \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) = \alpha \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3)$

1') $\det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 + \mathbf{a}'_2, \mathbf{a}_3) = \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) + \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}'_2, \mathbf{a}_3)$

2') $\det(\mathbf{a}_1, \alpha \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) = \alpha \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3)$

$$1'' \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3 + \mathbf{a}'_3) = \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) + \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}'_3)$$

$$2'' \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \alpha \mathbf{a}_3) = \alpha \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3)$$

$$(2) \text{ [交代性]} \quad \det(\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_3) = -\det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3), \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_3, \mathbf{a}_2) = -\det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3)$$

$$(3) \text{ [基本ベクトルに対する値]} \quad \mathbf{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{e}_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \text{ とすると}$$

$$\det(\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2, \mathbf{e}_3) = 1$$

証明 $\det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_3, \mathbf{a}_2) = -\det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3)$ 以外はそれ程難しくないので演習問題にまわす。 $D = \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 + \mathbf{a}_3, \mathbf{a}_2 + \mathbf{a}_3) = (\mathbf{a}_1 \times (\mathbf{a}_2 + \mathbf{a}_3), \mathbf{a}_2 + \mathbf{a}_3)$ を考える。 $\mathbf{a}_1 \times (\mathbf{a}_2 + \mathbf{a}_3)$ は $\mathbf{a}_2 + \mathbf{a}_3$ と直交するので $D = 0$ となる。また多重線型性は証明されているとして、それを用いると $D = \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) + \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_2) + \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_3, \mathbf{a}_2) + \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_3, \mathbf{a}_3)$ となる。 $i = 2, 3$ に対し $\mathbf{a}_1 \times \mathbf{a}_i$ と \mathbf{a}_i は直交するので、 $\det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_i, \mathbf{a}_i) = (\mathbf{a}_1 \times \mathbf{a}_i, \mathbf{a}_i) = 0$ となる。以上から $0 = D = \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) + \det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_3, \mathbf{a}_2)$ となり、命題が示される。 ■

演習問題 5.5 命題 5.13 を証明せよ。

命題 5.14 ベクトルの組 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ に対しスカラーを対応させる写像 $D(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3)$ が上の (1), (2) を満たすとき

$$D(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) = D(\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2, \mathbf{e}_3) \{a_{11}a_{22}a_{33} + a_{12}a_{23}a_{31} + a_{21}a_{32}a_{13} - a_{13}a_{22}a_{31} - a_{12}a_{21}a_{33} - a_{11}a_{23}a_{32}\}$$

となる。とくに行列式に対し

$$\det(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) = a_{11}a_{22}a_{33} + a_{12}a_{23}a_{31} + a_{21}a_{32}a_{13} - a_{13}a_{22}a_{31} - a_{12}a_{21}a_{33} - a_{11}a_{23}a_{32}$$

が成立する。

略証 $i = 1, 2, 3$ に対し $\mathbf{a}_i = a_{1i}\mathbf{e}_1 + a_{2i}\mathbf{e}_2 + a_{3i}\mathbf{e}_3$ と書けるので、これを用いて $D(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3)$ を変形していけば得られる。 ■

次節で一般の n に対しては拡張を行うが、代数的な立場から、即ち命題 5.13 が成立する様に拡張を行う。